

## 紙芝居の配架についての一提案

### A Proposal on the Arrangement of Picture-Story Show

岩 田 英 作

(地域文化学科)

キーワード：紙芝居、面出し、おはなしレストランライブラリー

#### 1. はじめに

日本国内いずれの図書館でもよい。児童図書コーナーを眺め渡した時、紙芝居の存在は、絵本や読み物に比べて目立ちにくいのが一般的である。例えば、島根県立大学松江キャンパス児童図書専門図書館「おはなしレストランライブラリー」では、紙芝居は【写真 1】のように配架してある。紙芝居専用の架台に、約 700 冊の紙芝居が並んでいるが、一見してわかるように、紙芝居 1 冊 1 冊の情報としては、薄い背表紙に書かれた題名と出版社名が見える程度である。おはなしレストランライブラリーでは、絵本の表紙をできるだけ面出しできるように専用の書架を用意して配架している。それらの絵本と比べた時、余計に紙芝居がさも遠慮がちに並んでいるように見えてしまうのである。

言うまでもなく、紙芝居は日本で生まれ育った大切な伝統文化である。にもかかわらず、紙芝居が論じられることは絵本に比べて圧倒的に少なく、こと紙芝居の配架に至っては、これまで取り上げられることすらほとんどなかった<sup>1)</sup>。

本稿では、紙芝居の配架について、問題提起の意味も込めて提案を試みる。



【写真 1】よくある紙芝居の配架の例

#### 2. 面出しの効果について

紙芝居も絵本と同様、面出しをして配架してはどうか。簡単に言えば、筆者が言いたいのはそれに尽きる。絵本の表紙を利用者に見えるように配架することは、多くの図書館で広く行われていることであり、今さらそのこと自体の効果疑う余地はないように見える。しかし、本当にそうだろうか。この前提が崩れてしまえば、紙芝居の面出しを提案したところで、さほど説得力はない。

そこで、このことを検証するために、おはなしレストランライブラリーで司書の協力を得て、次のような調査を行った。

作業の期間は、2019 年 1 月 12 日（日）から 20 日（日）にかけて、休館の 3 日間を除く計 6 日間で実施した。おはなしレストランライブラリーの絵本専用書架は、【写真 2】の通り、絵本の面出しをした上部と絵本の背表紙のみが見える下部からなる。そのうち、面出しをした絵本にシールを貼って、貸し出しの際、利用者が借りた絵本が面出しをしたほうから選んだのか、それとも面出ししていない下部から選んだのかカウントを行った。



【写真 2】絵本専用の書架

その結果は、【表 1】にまとめた通りである。6 日間で延べ 168 名の利用者が借りた 1495 冊の絵本のうち、面出しをした上部から借りた絵本は 813 冊、面出ししていない下部から借りた絵本は 682 冊であった。この数値だけでは、面出しに効果ありと胸を張って言えるほど明らかな差はないように見受けられる。重要なのは、それぞれの母数である。面出ししている絵本もそうでない絵本も、利用者の貸し出しに応じて冊数は変化するが、調査期間は、面出ししている上部の絵本は概ね 500～550 冊程度、面出ししていない下部の絵本は 5500～6000 冊程度が並んでいた。つまり、面出ししている絵本はそうでない絵本に比べて約 10 分の 1 の冊数に過ぎないが、利用者の貸し出し冊数は面出ししていない絵本を 100 冊余り上回る結果となったのである。

以上のことから、面出しして配架することの効果を十分に裏付けることができたと言えそうだ。

【表 1】面出しの効果についての調査

実施期間：2019 年 1 月 12 日～20 日（14 日、15 日、19 日を除く）		
実施場所：島根県立大学松江キャンパスおはなしレストランライブラリー		
調査員：司書 2 名（尾崎智子・内田絢子）		
調査対象となった利用者数：168 名		
	面出しした絵本	面出ししていない絵本
貸し出し冊数（延べ）	813 冊	682 冊
母 数	500～550 冊程度	5500～6000 冊程度

### 3. 紙芝居の配架について

#### 1) 配架と表紙の見せ方の工夫

市販の紙芝居は、絵本と異なり、縦横の寸法は決まっている。紙芝居は、通常、「舞台」と呼ばれる扉付きの枠に入れて演じるので、その制約から一定の大きさに揃えられている。

また、紙芝居は、1枚1枚がばらばらなので、それらを収めておくケースが必要となる。この点も、絵本とは大きく異なる点である。本稿で紙芝居の表紙と言う場合、それはケースの表紙のことを指す。



【写真 3】紙芝居の表紙

紙芝居の表紙は、【写真 3】のように、絵、題名、簡単なあらすじ、作者、出版社等で構成され、それらの紙芝居に関する情報の配置もほぼ定まっている。

そこで今回、3通りの表紙の見せ方を考えて、紙芝居を配架してみたのが【写真 4】である。180センチ幅の書架に面出しで、上段・中段・下段3通りの仕方では並べてみた。

上段：紙芝居を重ねることなく、表紙全体が見えるように並べた。

中段：絵と書誌情報（タイトル・あらすじ・作者名等）が見えるようにして重ねて並べた。

下段：絵のみ見えるようにして重ねて並べた。

そうすると、上段に5冊、中段に6冊、下段に8冊の紙芝居を並べることができた。ただし、上段、中段はやや無理をして並べており、書架から10センチほど紙芝居がはみ出した。

通常、同じ書架に絵本を並べた場合、1列に8冊程度を並べることができる。できれば、紙芝居も絵本と同じくらいの数を面出しできると理想的である。



上段 5冊  
表紙全体見える  
中段 6冊  
情報部分見える  
下段 8冊  
絵のみ見える

【写真 4】紙芝居の3通りの配架

しかしながら、1列に8冊の紙芝居を並べるためには、肝心の書誌情報の部分を犠牲にしなくてはならない。現段階で現実的な配架は、中段の並べ方のパターン、すなわち、絵と書誌情報が見えるように1列に6冊並べる仕方であろう。

ここから先は出版社への要望・提案になるが、書誌情報の配置を思い切って変更してみてもどうか。書誌情報のすべてでなくてもよい。題名と作者名だけでもよいから、絵の上下の空いた部分に移動するのである。そうすれば、下段の並べ方のパターンでも、絵本の表紙と同様、題名と作者名という基本情報を絵と共に一見して知ることができ、かつ8冊並べることが可能となる。

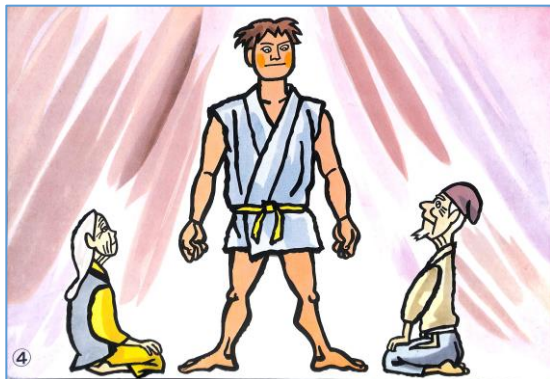
## 2) ダイジェスト版の提案

紙芝居と絵本の大きな違いとして、絵本は手に取ってすぐに開くことができるが、紙芝居はそういうわけにはいかない。前にも言ったように、紙芝居はケースに入っているので、内容に触れようとすると、ケースから出すという作業が必然的に加わる。さらに、紙芝居と絵本には次のような大きな違いがある。紙芝居も絵本も、基本的に絵と文字で構成されているが、問題はその配置の仕方である。絵本は、ページを開けば、そこに絵と文字が同時に存在し、読者はなんの戸惑いもなくそれらを同時に受容することができる。それに対し、紙芝居の場合は、絵は表面に文字は裏面に書いてあり、しかも絵に対応する文字は絵とは別の用紙に書かれている。一人の読者が、絵本と同様に紙芝居の絵と文字を同時に楽しむことはきわめて困難である。そもそも、紙芝居は一人で楽しむようには構造上出来上がっていないのである。

例えば、ある母親が子供のために紙芝居を借りに図書館を訪れたとする。母親が1冊の紙芝居を手に取り、紙芝居の内容を確認しようとした時、そこには、ケースから取り出し、そして別々の用紙に書かれた絵と文字を見比べるという、絵本にはない2つの壁が存在する。この壁を、完全とは言わないまでも、なんとか壁の高さを低くして、できるだけ絵本に近づける方法はないものだろうか。読者が、ケースを開く手間をかけることなく、その話の内容をざっとでもいいから知ることができ、合わせて絵の雰囲気も知ることができるような工夫。紙芝居のケースの表紙には、題名の下に作品のごく簡単なあらすじ・導入が数行書かれているが、おそらくそれも、いま述べた壁に対するひとつの配慮の表れであろう。そこで、これも出版社への要望・提案ということになるが、ケースの表紙の右側のスペースに、絵と文字による紙芝居のダイジェスト版を載せてはいかがであろう。そこで試みに、『ちからたろう』（脚本：川崎大治、絵：滝平二郎、童心社）で、次ページの通りダイジェスト版を作成した。紙芝居の効果的な情報提供の試案として受け取っていただきたい。



『ちからたろう』ダイジェスト版試案



栗から生まれたちからたろう  
ごはんを食べに食べて  
こんなに立派な若者に



ちからくらの旅に出て  
どんな相手もなんのその  
みんな家来にして  
ちからたろうの旅は続く



ふと通りかかった町で  
娘がひとり泣いていた  
おそろしいばけものが  
もうすぐさらいに来るのだという



これはほうってはおけぬ  
いまこそちからたろうの出番だ  
ばけものよ いざしょうぶ  
ちからのほどを見せてやる

#### 4. おわりに

おはなしレストランライブラリーでは、紙芝居の貸し出しにはひと工夫している。簡易な舞台と拍子木を10セット用意して、【写真5】のように掲示をして、利用を促している。舞台と拍子木があるのとないのとでは、聞き手の盛り上がりと集中力がずいぶん違うということをこれまで経験してきた。家庭でも紙芝居をより楽しんでもらいたいという思いから考案し、舞台も持ち運びに便利のように特別に作ったものである。



【写真5】舞台と拍子木の貸し出し

本稿のねらいも、まさに図書館における紙芝居の利用促進にある。そのためには、紙芝居そのものの質を高め、そのことを評価することはもちろん重要だが、今回は徹底して外見（表紙）の見せ方（配架）にこだわった。それは、図書館における紙芝居の配架の無頓着さ（特に絵本と比べて）に対して、「これからもずっとこのままでいいのですか」という声を投げかけたかったからである。そして、このことについて、紙芝居の出版社も一緒になって考えていただければ幸いである。紙芝居をより多くの人に楽しんでもらうために、できることはまだたくさんあるはずである。

#### 【注】

1) 以下の紙芝居に関する代表的文献を見ても、紙芝居の配架についての言及はほとんどなされていない。

『心をつなぐ紙芝居』（阿部明子・上地ちづ子・堀尾青史編、1991、童心社）

『紙芝居・共感のよろこび』（まっついのもりこ、1998、童心社）

『紙芝居百科』（紙芝居文化の会、2017、童心社）